大学出版

8号
'89秋

大学出版部協会
Association of Japanese University Presses

北海道大学図書刊行会
Hokkaido University Press

慶應通信
Keio Tsushin Co., Ltd.

産能大学出版部
Sanno Institute of Business Administration

玉川大学出版部
Tamagawa University Press

中央大学出版部
Chuo University Press

東海大学出版会
Tokai University Press

東京大学出版会
University of Tokyo Press

東京電機大学出版局
Tokyo Denki University Press

東京農業大学出版会
Tokyo University of Agriculture Press

東京理科大学出版会
Science University of Tokyo Press

法政大学出版局
Hosei University Press

放送大学教育振興会
The Society for the Promotion of the University of the Air

明星大学出版部
Meisei University Press

早稲田大学出版部
Waseda University Press

名古屋大学出版会
The University of Nagoya Press

大阪経済法科大学出版部
Osaka University of Economics and Law Press

関西大学出版部
Kansai University Press

九州大学出版会
Kyusyu University Press

大学出版
8号

Fall・1989

「世界の大学図書展」の開催――――――――――山田　渉　1
一九八九年度夏季研修会の報告――――――――山下正三　3
場所と風景と人間――日常的世界のスペクタクル――――山岸　健　7
大学出版部ニュース――――――――――――――15
日本生命財団 平成元年度 研究助成・出版助成贈呈式――――19
新刊案内'89・4～9――――――――――――――20
あとがき――――――――――――――関野利之

大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛

本小冊子の表示価格は、税込価格です。

「世界の大学図書展」の開催

山田　渉
（大学出版部協会幹事長）

このたびわれわれ大学出版部協会は、（社）出版文化国際交流会との共催により「世界の大学図書展」を去る十一月二日より五日まで、東京・池袋・サンシャインシティのワールドインポートマート七階にあるミプロ国際展示場において開催いたしました。

この図書展は、大学出版部協会の創立二十五周年記念行事の一環として企画されたものであり、世界各国の大学および大学の附属研究期間で刊行されている図書や紀要類を一堂に集めて広く展覧に供し、国際間の大学における学術情報の交流の振興を図るとともに、わが国の学術出版文化に寄与することを目的として行なわれたものであります。

日本においては、このような世界の大学出版物を網羅する図書展は未だ開催されたことがなく、会期中は約三千人が会場を訪れ、大学関係者や多くの研究者、図書館関係者の間で注目された展示会になったことと存じております。

海外からは、各国の在日大使館や大学出版部協会のご協力のもとに、アメリカ・中国ほか二〇数か国の大学より約三千点の出品があり、国内では、大学関係諸団体（国立大学協会、公立大学協会、日本私立大学団体連合会、国立短期大学協会、全国公立短期大学協会、日本私立短期大学協会）のご協賛を得て、約三百校より八千点の出展がみられました。

またこの図書展の開催にあたっては、外務省、文部省はじめ国際交流基金、日本図書館協会、日本放送協会および日本書籍出版協会より、本図書展の趣旨と意義についてご理解とご賛同を得てご後援をいただきました。

ちなみに、海外からの展示図書には一九八八年、一九八九年発行の新刊書がかなり多く、アメリカの四五大学、三八二冊、中国の一二〇〇冊はじめ、出品参加国は、アメリカ、カナダ、メキシコ、ドミニカ、イギリス、東ドイツ、ベルギー、フランス、イタリア、バチカン、スペイン、チュニジア、ザイール、ジンバブエ、韓国、中国、香港、シンガポール、フィリピン、オーストラリア、ニュージーランドなどの国々に及んでおります。

本図書展の開催初日の十一月二日には午前九時三〇分より会場にて、三笠宮崇仁親王殿下のご臨席を仰いで、ご後

「世界の大学図書展」開催のテープカット

援各団体の代表者によりテープカットが行なわれました。

ふりかえってみますと、一九六二年六月、ホノルルで開かれた太平洋地域学術出版部会議に、日本からは大学出版部協会の初代幹事長・箕輪成男氏が参加され、ついで一九七二年十一月には、ホノルル会議十年を記念し、またユネスコの国際図書年ということもあって、アジア人によって組織されたアジアにおける初めての「アジア・太平洋地域大学出版部会議」が、箕輪幹事長のもと、東京で盛大に開催されました。

この会議はアジアの連帯を強化する目的で開かれ、アジアの各国の大学出版部の現状が報告されましたが、ほとんどの大学出版部から、製作・編集スタッフがほしい、信頼できる印刷所がない、資本が十分でない等の問題が提起されたことを憶えております。

ちなみに、この会議にあわせて新宿・紀伊國屋書店で開かれた「アジア・太平洋地域大学出版部刊行図書展示会」では、国内千点・海外百点の出版物が出品されました。その規模はほんの小さなものでしたが、やがて今回の「世界の大学図書展」へとつづく、まさに第一歩だったことも間違いないでしょう。大学出版部に存在価値があるとすれば、その一端は、こうした活動をとおして、大学と社会をつなぎ、わずかでも社会に貢献することではないかと考えております。

一九八九年度夏季研修会の報告

山下　正（東京大学出版会）
三浦邦宏（明星大学出版部）

一九八九年度夏季研修会は八月二十四～二十六日の三日間、きびしい残暑を逃れて、東海大学嬬恋高原研修センターで開催された。当初は会場を伊豆下田の明星大学研修センターに設定したが、伊豆沖地震・噴火の危険性を考慮し変更を余儀なくされた。

研修会は初参加の大阪経済法科大学出版部、放送大学教育振興会を含めて約五〇名。また、琴東信会長をはじめとする韓国大学出版部協会代表団（これまでの最高の一五名が参加）を迎え、会場は熱気に包まれた。

ただ、残念なことに山田幹事長が風邪をこじらされ、ドクター・ストップで出席できなかったため、幹事長あいさつ、総括等は山下副幹事長が代行した。

ここでは、以下、Ⅰ 日韓大学出版部協会合同セミナー、Ⅱ 分科会、Ⅲ 韓国大学出版部協会代表団との交流、の三つに整理して報告しよう。

Ⅰ　日韓大学出版部協会合同セミナー

このセミナーは今年で第八回目を数える。今回のテーマは「新しい段階に直面した大学出版部の現状と今後の方向」で、日本は関野利之・玉川大学出版部長、韓国は權義武・啓明大学出版部長の両氏が報告した。

日本と韓国の両大学出版部協会の交流は一九八一年八月の韓国大学出版部協会訪日団（李桓団長）との意見交換にさかのぼる。これを皮切りに交互に相手国を訪問し、セミナーを実施してきた。これまでも、大学出版と環境、大学教材の開発、著作権問題、中国大学出版社協会との交流といったテーマで行なってきた。とはいうものの、率直にいって、これまでは〝同じ土俵〟で議論することは極めて困難であった。

ところが、今回はいくつかの点でこれまでの段階をクリアーし、新しい局面での交流を可能にする道を拓いたといえよう。

まず、日韓双方の報告の中に、学術出版の採算性、教科書企画・編集上の工夫、英文出版の可能性といった共通する問題提起がなされた点である。つぎに、韓国の報告は、大学出版部の現状が組織形態・規模、出版点数、発行部数などデータに基づいて初めて提示されたことである。さらに、今回は韓国側が出版部長だけでなく、実務担当者（責任者）が参加され、議論の中味が出版・製作・販売の実際に引きつけたものになった点である。

これによって、お互いの類似点と相違点が明らかになり、双方の立脚点が確認できたのである。その点で今回のセミ

ナーの意味は小さくない。

ちなみに、韓国大学出版部協会は現在五七大学出版部が加盟。韓国の一九八七年の新刊刊行点数は三万八三〇一点、そのうち大学出版部の新刊は五七〇点で約一・五％を占める。一九七七年が一万四三七五点だから、この十年間で二・六倍と驚異的な伸びを示している。総出版点数に対する出版部協会の刊行点数は、日本と比較してほぼ同じ程度の位置を占めるといっていい。

Ⅱ　分科会

各部会の活動が協会活動の基本であることは間違いない。各部会の目標やテーマはそれぞれ異なるし、その活動のスタイルにも差があるものの、全体として、各部会とも着実にこれまでの活動を成果に結びつけてきているし、新しい可能性への模索も期待できる状況にある。

①編集部会

テーマ・製作の進行と管理について

予定どおりに書籍を刊行することは簡単ではない。一冊ならともかく、年間を通して、一定の量をスケジュールどおりに刊行することは並大抵のことではない。だから各出版部にとっても最重要課題の一つである。

一般に組織が小さい場合は、編集者は企画（タテ）・原稿獲得（トリ）・原稿整理・校正等の本づくりまでを一貫して担当する。東京大学出版会では三年前に編集製作部を設け、いわば、〝つくり〟の専門化をはかったが、このケースをもとに、編集と製作、製作と進行等について検討された。また、組上げから配本までの刊行スケジュールも提示された。

つぎに、協会の存在や活動がもっと広く内外に理解されることは極めて重要である。そのため協会のＰＲ用『冊子』の発行が検討され、編集部会の案が提出された。

さらに、『大学出版』第8号の編集会議を行なった。今後は読みもの風のものもとりいれていきたいとのことである。

②営業部会

テーマ・図書館への学術書の普及活動について

一九八四年十一月、営業部会が中心になり、協会は大学図書館に出版情報の流通についてアンケート調査を行なった。その回答率は九〇・四％という素晴らしい結果を得た。この活動は出版業界で注目を集めるとともに、協会として大学図書館への自動納入方式を制度化させるという画期的な成果をあげたことは周知のとおりである。

今回、第二回目の図書館調査を行なう計画が検討された。『新刊速報』はどう利用されているのか、『大学出版』はどう活用されているのかなど、興味あるところだが、準備が進んでいる。

この分科会だけでなく、営業部会は協会二十五周年記念事業の最後の計画である「世界の大学図書展」（十一月二～五日）の実施に当たり、各大学の発行している図書、研究雑誌・紀要類の収集から会場の設営、図書の展示と、図書展の中心部隊としての役割を担ってきた。そのための

実務的な会議・作業が何回も続いたことを付記しておこう。

③刊行助成部会

テーマ・刊行助成拡大のために

刊行助成部会は新しい部会である。これまで、刊行助成については日本生命財団刊行助成に関する企画のエントリーから刊行に至る諸手続等を含む会合・実務に終始してきたといっていい。そこで、刊行助成部会は、新しい刊行助成を獲得すべく部会を発足させたのである。

今回は、各出版部が現在、助成を受けて出版している現状について報告した。それをふまえた上で、具体的には、①全国の大学に対して刊行助成についての実態調査を行なう、②現存する助成財団へのアンケート調査を行なうことを確認した。

また、田口顧問から「各大学には研究助成制度があるが、研究には成果の発表が必ず必要なので、そのための出版助成を制度化することが重要である」との貴重な指摘があった。

Ⅲ　韓国大学出版部協会代表団との交流

第八回　日・韓大学出版合同セミナーに参加された韓国大学出版部協会代表団は、琴東信会長（檀国大出版部長）以下総勢一五名の方々であった。東京で一泊した後、代表団は伊香保温泉に一泊し、バスでセミナー会場である東海大学嬬恋研修センターに到着した。昨年韓国・慶州でのセミナーに参加した私達数名は、懐かしい顔ぶれにことのほか再会を喜び合った。

今回のセミナーに多数の方々が来日されるとの報せを受け、ホスト側である我々協会として日程の調整を行なったわけであるが、例年日本から韓国でのセミナーに参加する際には、統一主題（テーマ）の討論に対しては一緒に参加するが、実務者レベルの主題に関しては言語の問題もあり、別のプログラムが用意されていること、又、今回の代表団員の多くの方々が初めての来日であることなどを考慮し、セミナー第二日目のスケジュールを急拠変更し、日光方面を観光していただくこととし了承を受けた。案内役として合同セミナーに第一回より連続参加の小野沢幹事（産能大出版部）と私三浦（明星大出版部）、それに昨年のセミナーに参加された高野総務担当幹事（東京電機大出版局）の三名が指名され同行することとなった。

旅行社との接渉は全て小野沢氏にお願いし、八月二十五日朝研修所前でセミナー参加者全員の記念撮影の後、皆に別れを告げ、サロンバスで一路日光を目指して出発した。前日夕方の激しい雨が嘘のように、おだやかな日和であった。車中では前部座席に座られた各出版部長先生方は旅の疲れか静かに車窓の景色を楽しんでおられたが、後部サロン席に陣取った案内役三名と崔事務局長（檀国大）、申華植氏（延世大）、朱弘均氏（建国大）、朴贊永氏（江原大）の韓国側四名（この方達は全て実務担当の出版部員であった）は、出版に関することは勿論両国の文化、社会情勢など巾広い意見の交換を行ない和気合い合いであった。

群馬県側は非常に晴天であったが金精峠を越え栃木県に

研修センター前での記念撮影

一歩足を踏み入れた途端、稜線に沿って一面のガス（霧）であった。途切れ途切れの晴れ間より湯の湖、戦場が原と車窓より眺め、中禅寺湖畔の昼食場所へ着いた時は生憎小雨模様となり、湖は一面霧の中であった。昼食を済ませ華厳の滝に向かうとやはり深い霧の中、落ちる瀑布の音のみ聞こえる。滝下方の展望台へエレベーターで降りたところ、にわかに霧が動き、ほんの数分ではあったが、その全容を我々の前へ現わした。韓国の方々は無事記念撮影を済ませ大喜びであった。

〝日光を見ずして結構と言う勿れ〟と古くから名高い東照宮陽明門の彫刻の素晴らしさ、拍手を打つと啼くと言われる〝啼き龍〟に感嘆し、一路雨の中を宿泊先の鬼怒川温泉ホテルへと向かいそれぞれの部屋へチェック・イン、午後六時より宴会場にて懇親会を開いた。初めの内は何となくぎこちなかったが、アルコールが入るにつれ賑かに、和やかになり、宴半ばからはカラオケが始まって得意（？）のノドを披露し合った。琴会長の「北国の春」を皮切りに、皆さんの歌の上手さには全く驚かされた。全員が一曲ずつ歌い終った頃には、いつの間にか予定の時刻をとうに過ぎ、時の経つのを忘れてしまうほどであった。最後に琴会長が今回の日本側の対応に心から感謝すると共に、来年韓国での合同セミナーに多くの方々が参加されるよう歓迎しますと挨拶され、更に両国大学出版部協会の益々の発展と友好が深まることを期し、全員で万歳を三唱して懇親会を終了した。

翌朝雨の中、鬼怒川温泉駅よりロマンスカーで東京へ戻る車中でも又、前日より更にうちとけた雰囲気の中で歓談する内に浅草駅に到着した。迎えのバスに乗り込む韓国大学出版部協会の方々と固い握手を交わし、来年のセミナーでの再会を約し名残りを惜しんだ。琴会長以下代表団の方々が我々日本の大学出版部協会の心づかいに対し、心から感謝するとのお言葉を頂戴したが、異なった文化を持った国同士が「大学出版」と云う共通の仕事を通して理解し合い、いろいろな問題を更に突っ込んで討論し合う中で、もう一歩進んだ交流を深めるために、お互いに努力し合うことを切に望むものである。

場所と風景と人間

――日常的世界のスペクタクル――

山岸　健
（慶應義塾大学文学部教授）

いま、私たちの身辺の風景はどのように変わりつつあるのだろうか。時代はどのような方向に向かって、どのようなスピードで動いているのだろう。どこにいっても私たちの目に似たような風景しか映らない時代になってしまったのか。それぞれの土地や場所に特有の雰囲気が失われてきているのだろうか。私たちはどのような世界で生きているのだろう。風景も人間もことごとく抽象的なものになってきているのだろうか。私たちの身辺と日常生活の場面に注目しながら、時代の様相と人びとの生き方を理解するように努めたいものだ。誰もが他者たちや環境世界に、歴史に、また、風景に巻き込まれた状態で生きているのである。私たちは人と人とのさまざまなコンタクトやつながり、結びつき、相互作用・相互行為のなかで生きている。社会的世界で、風景的世界で生きているのだ。

〈平凡な日常生活〉に目を向けないわけにはいかないのである。言葉をかけることができる人が身のまわりにいないとき、私たちは途方に暮れてしまう。暗闇のなかでは先へ進むことはできない。たどるべきコースや道筋、方向・方角が分からなかったり、目印や道標などがないときには私たちは手の打ちようがない。私たちは目印や道標を探し求めながら生きてきたのである。目印から目印へと、目印をたどりながら行動してきたのだ。人と人との交わりのなかで生きてきたのである。和辻哲郎は人間を〈間柄存在〉と見たが、人間は個人であるとともに社会でもあったのだ。ハイデッガーは人間の存在の仕方を〈世界・内・存在〉としてとらえたが、こうした人間は共同相互存在としても理解されたのである。九鬼周造はこうしたハイデッガーや和辻の見解に言及しながら、「モンテーニュの「人間学」からコントの「社会学」への発展は必然的である」と述べている（『九鬼周造全集　第三巻』岩波書店、三七ページ、人間と実存、一　人間学とは何か）。九鬼が見るところでは、社会的人間としての歴史的人間においては空間性という問題も生じてくるのであり、人と人とは離在を拒否する動的意味において邂逅的距離的存在なのである。距離とは単なる静的な固定的間隔を意味するものではなかった。堂々めぐりでは邂逅は成立しない。邂逅を可能にするためには人と人とのあいだにおいて、ある特定の方向がとられなければならない。九鬼はこうして距離性と定向性を人間学的空間の性格

と見たのである。

ここで見たように九鬼が方向性、方向のとり方に注目していることには深い意味があると思う。私たちが生きている日常的世界はさまざまな仕方で方向づけられているのである。あの手この手で秩序づけられているのである。さまざまな方法でコスモス化されているのだ。カオス（混沌）のなかで生きつづけることは極めて難しい。何が何だか少しも分からないような暗闇の穴を見つづけることはできないし、無方向の世界で歩みつづけることはできないのだ。カオスの回避、カオスからの脱出、コスモス化、コスモスの構築、私たちはつねにこうしたことを試みてきたのだ。すでにしばしば指摘されてきたことだが、〈意味〉という言葉には〈方向〉という意味もあるのである。方向づけるということは意味づけるということでもあるのだ。〈見る〉ときに問題になるのは視点であり、地点や場所の選び方だが、視点や場所というときには高さが問題になってくる。位置のとり方、高さのとり方、角度のとり方、距離のとり方、これらのあいだには深い関連性が見られるのであり、視点とパースペクティヴ（遠近・視野・眺め・眺望）を切り離すことはできない。見ることや眺望においてだけではなく、音や響や匂いや香りにおいても場所や地点が問題になってくる。さまざまな場所から離れた状態で私たちが存在することはできない。人間はたがいに切り離された状態で個別的に個人として生きているが、社会的存在なのであり、人と人とのつながり・コンタクト・交わりのなかで日常生活を営んでいる〈社会的〉人間なのだ。私たちはたがいに向き合いながら生きている時間的空間的存在でもあり、そのつどさまざまな場所を体験しながら日常的世界にたいして働きかけつづけている身体的存在でもあるのだ。人間は意味のなかで生きつづけてきた。サインとシンボルの世界で、シンボルの宇宙で生きつづけてきた。さまざまな出来事のまっただなかで、人びとともに人びとのなかで生きてきたのである。誰もがそこに生まれ、そこで人びとと交わっている社会的世界やこうした世界で体験される出来事こそ私たちにとって日常的な社会的現実だが、私たちは社会的世界を体験しているばかりではなく、風景的世界をも体験しているのである。土地や場所、地方というならば、そこで生活している人びと、そうした人びとの暮らしと日常生活、風俗、風習、習俗、生活慣行、生活組織、文化などがクローズ・アップされてくるが、風景や風土、景観、景色なども私たちの視野に入ってくるのである。

私たちはいたるところで、それぞれの土地や場所や地方でまことにさまざまな風景を体験する。家や家まわり、屋根の姿かたち、屋根の造り方、壁の様子、部屋の使い方、間取り、耕地の様相などはそれぞれの土地や場所に応じて異なっており、その地方やその土地で目に入ってくる景色・景観、耳に入ってくる音や響、そこで体験される匂いや香り、その場所で手で触れることができるもの、肌に触れる風があるのだ。土地や場所が異なれば吹く風が異なるだけではない。人びとの気風やものの見方・考え方、行動の

パターン、生活の様式やスタイル、暮らしの技術と知識、生活の処方箋、衣・食・住にわたる暮らしの歴史と姿、風俗、人びとの生活史、人生などにも違いが見られるのである。人びとは生きるためになんとさまざまなかたちで生活のすべてにわたり工夫を試みてきたことだろう。生きるためにはらわれた苦心と苦労、さまざまな工夫と生活の知恵に驚きの目を見はらないわけにはいかない。家や家まわりに、村里のそこここに、私たちの身辺のいたるところに、人びとの汗と涙の結晶、生活の技術、暮らしの歴史を見ることができるのである。人びとは大地に人間の姿を刻みつづけてきた。生活のドラマが見られない場所はほとんどない。私たちが体験する風景の多くは日常生活の光景、人びとの暮らしの姿、私たちが生きている環境世界の様相・風貌にほかならない。風景は人びとの目を楽しませるためだけにあるのではない。風景は眺められるだけのものでもない。風景は私たちの存在の次元なのであり、私たちが生きている日常生活の世界・日常的世界の全体といってもよいものなのだ。あらゆる風景は私たちが生きている世界を読み解くためのテキストそのものなのである。人それぞれの生活史は人と人との出会いや交わりや別れ、さまざまな出来事、*relationship membership* などとともに語られるが、風景体験にも注目したいと思う。私たちの日常生活や存在の深いところに土地や場所や風景や風土の体験が入ってきている。……という土地や場所での出会いや別れであり、……での日常生活、人と人とのコンタクト、コミュニケーション・ライフなのだ。……での読書体験なのだ。人の顔や風景の個別性、独自性に注目したい。そこにいかなければ体験できない風景がある。風景とはもともとそういうものなのだ。風景のオリジナリティ、ローカリティに私たちは強く心をひかれるのである。風景とはローカル・カラーそのものなのだ。場所と空間、空間と時間、風景と景観。人びとの日常生活に目を向けるということはこうしたものについても心くばりを怠たらないということなのである。

小谷村・小谷郷土館にて

社会学を学ぶということは手元や足元、身辺、日常的世界を異邦人の目で眺めることであり、見なれた風景をできるだけフレッシュな目や心で見ることでもあるのだ。また、

〈平凡な日常生活〉を主題化して社会的現実と人びとが生きている世界をできるだけ多次元的に理解しようとすることでもあるといえるだろう。社会、社会的世界、日常生活、動きつつある時代、変わりゆく環境世界、これらのそれぞれを理解することが社会学の課題なのだが、人間や人間存在を理解することも、また、風景や景観を理解することも社会学の課題となるのである。日常的体験の文脈に注目したいと思う。特定の土地や場所、それぞれの地方、いろいろな界隈や地域や地区などにおいての出会いや日常生活がある。人と人との交わりや結びつき、葛藤もある。風景体験もある。いろいろな土地や場所で人びとが体験する風物や風情もある。風致地区という言葉もある。私たちの生活史に大きな影を落としている風景がある。生活史を語るとき、触れないわけにはいかない風物や風物詩がある。風景、風土、風光、風物詩、風俗、風貌、風俗……〈風〉という言葉にはなんとさまざまなひろがりがあることだろう。風が吹き荒れることもあるが、風が吹いてくる方向がある。川の流れに見られる方向性もある。車の流れの方向性もある。道に出たら、そこに踏みとどまるわけにはいかない。進むべき方向・方角を決めて、歩み始めなければならない。家の内と外とはまったく異なっているのだ。家のなかで私たちは身や心を休めることができるのであり、くつろぎの時を過ごすことができるのだ。親しい人びとと水入らずの生活を楽しむことができるのである。東西南北と人びとはいう。太陽と星が問題なのだ。日の出と日没に注目しないわけにはいかない。星空を仰がないわけにはいかない。右と左・上と下・前と後、私たちの身体はあらゆる意味で座標原点なのだ。方向と方位の、距離の、パースペクティヴの、動機と行為の、ゼロ・ポイントなのである。身体を世界の軸、根源的空間、意味の核、世界への投錨と見たのはメルロー＝ポンティだ（『知覚の現象学』）。

それぬきでは自分の生活史やアイデンティティ（自己同一性、存在証明、この私自身）を語ることができないような風景、つねにそこからスタートし、また、そこに私たちがもどっていくような風景、幼少時の日々とひとつになっている風景、生活史に大きな影を落としていて、生活史を方向づけているような風景、それぬきでその土地やその場所を語ることもスケッチすることもできないような風景、こうした風景を〈原風景〉と呼びたいと思う。〈原風景〉について語れない人はいないだろう。私の場合、それは越後、長岡の雪景色であり、信州のとある地方、ある土地の風景なのである。いまでは合併で長野市の一部となったが、かつての七二会（なにあい）村の風景が私のまぶたと心に焼きついている。母の生まれ故郷、七二会、ほとんど夏休みごとにこの山村の母の実家へいき、毎夏のようにこの村で何日も何日も過ごしたものだ。山肌に張りついているような集落や畠や田圃、山村風景などをいまでも思い出す。鎮守の森もあった。地蔵峠を越えて戸隠へいったことがある。七二会村は犀川のほとりから地蔵峠にかけてひろがっていた。長岡は信濃川の河畔にひろがっている地方都市だ。市

街地から東山と西山が見える。それぞれが山なみをなしている。東山の中心となっているのは鋸山だ。長岡に悠久山というところがある。神社があるが、公園もある。東山の麓にある悠久山は冬になるとスキー場になる。誰にもなつかしい風景のひとつやふたつはあることだろう。長岡と七二会、そして長野、こうした土地は私の生活史に大きな影を落としている。大学生活を送るようになって東京に出てきたが、いま、私は東京のさまざまな場所に強い関心をいだいており、できるだけ深く東京を体験したいと思っている。永井荷風の『日和下駄』にならいたいと思う。

「土地のさまざまな場所はまた人間でもある」といったのはマルセル・プルーストだが（『ジャン・サントゥイユ』、彼は『失われた時を求めて』のなかで〈コンブレーの社会学〉（この〈　〉は筆者）という言葉を用いている。このコンブレーにはふたつの散歩道があった。そのうちのひとつは〈スワン家の方へ〉と呼ばれるものであり、このコースはそれほど長いものではなかった。野原と野原を渡る風が体験される散歩道だった。もうひとつ〈ゲルマントの方へ〉と呼ばれたコースはかなりの距離を歩くもので、ヴィヴォーヌ川の流れに沿って進む散歩道だった。水と花園のような睡蓮が体験されるコースだった。プルーストは、そのリラ、そのさんざし、その矢車草、そのひなげし、そのりんごの木をもったメゼグリーズの方と、そのおたまじゃくしの川、その睡蓮、そのきんぽうげをもったゲルマントの方とは、と書いているが（『スワン家の方へ』）、メゼグリーズの方とはスワン家の方なのである。異なる方向に応じてくりひろげられた風景的世界、社会的世界があったのだ。プルーストのこうした場面にオルテガやサルトルやボルノウらが注目している。プルーストのメッセージは文学作品の世界にとどまるものではない。方向や方角にはなんと深い意味があることだろう。プルーストのこのコンブレーの場面ほど方向や方角、風景的世界と社会的世界について私たちに深く考えさせてくれる作品はない。ゲーテ、バルザック、フローベール、リルケ、マン、あるいはホーフマンスタール、ムジール、プルースト……こうした人びとの作品は社会学のフィールドにストレートに入ってくるのである。人びとが生きている日常的世界や私たちが体験する風景とならんで、さまざまな文学作品において私たちが体験するリアリティもすべて社会学の注目さるべきステージであり、スペクタクル（光景）なのである。

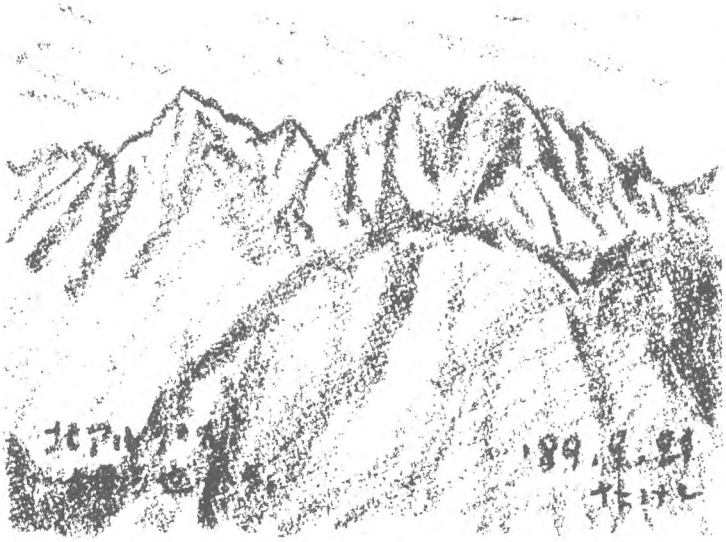
科学における概念を方向と見て、方向こそ創造的な行為であり、それは風景のなかに〈意味〉を引き入れることだ、といったのはサン＝テグジュペリだった（『サン＝テグジュペリ著作集　4　手帖』宇佐見英治訳、みすず書房）。彼は人間を〈住まう者〉ととらえ、こうした人間にとって事物のもつ意味は家のもつ意味にしたがって別様になる、というのである（『サン＝テグジュペリ著作集　1　城砦Ⅰ』）。自分の生活を多くの場景をもち、決して終幕とならない劇と呼んだソーローは、「どこにわたしが腰をすえるにしてもそこでわたしは住むことができ、それに応じて風景はわたしから

展開した。家とは sedes（坐席）にほかならないではないか」と書いている（ソーロー、神吉三郎訳『森の生活――ウォールデン――』岩波文庫、一一三ページ）。ソーローは自分の家には三つの椅子があるという。孤独のための椅子、友情のための椅子、社交のための椅子。大勢の訪問者があったときには、それらのすべてに対しても第三の椅子しかなかったが、彼らはたいがい立っていることによって空間を倹約したのである。家のうしろの松の林をソーローは〈とっておき〉の部屋と呼んでいる。ソーローには心に残る言葉がいくつもある。――「森のなかで道に迷うのはいつでも、驚くべき、記憶すべき、そして価値のある経験である。（中略）われわれはかりそめに歩くときにも、無意識にではあるがつねに、どれか善く知っている標識または岬角によって水先案内のように舵（かじ）をとっているのであり、いつもの航路からはみ出るときにも心のなかではどこか近所の岬の位置をかんがえているのである」。（同書、二二二ページ）また、ソーローは、「湖水は風景のうちでいちばん美しく表現に富む部分である。それは大地の眼であり、観る者はそれをのぞきこんで自分自身の心の深さを測る」と書いている（同書、二四〇ページ）。どこから見てもソーローの『森の生活』はすばらしい本だ。私たちに人生を生きることを深く考えさせてくれる作品だ。生活があわただしくなっているような現代においては、ソーローのこの本は人生を深く生きる人間的な生活についてのすぐれたメッセージといえるだろう。

大学のキャンパスの風景はさまざまな建物やベンチや緑や草花などとならんでゆききする学生たちによってかたちづくられている。時代とともに学生の服装や身なりもさまざまに変わってきた。大学で私たちの目に映るのは〈青春時代〉の風景なのである。キャンパスほど若々しい声と生き生きとした表情が体験される場所はないだろう。人との出会いや交わりをつうじてゆたかな人間形成が期待される場所だ。さまざまな読書やクラブ活動、ゼミナール活動をつうじて人生についての展望がしだいに開かれる場所だ。大学時代は誰の場合でも人生のもっとも忘れ難い、もっとも輝かしい時代といえるだろう。この時期に何冊かのすばらしい本にめぐり会うことができた人は幸福な人だと思う。生涯にわたって手ばなすことがない書物をこの時期に手にすることができた人は人生を深く広く楽しく生きることができるだろう。読書の体験は私たちの心に限りなくゆたかな広がりをもたらしてくれるだろう。本に接する楽しみと喜びは大きい。また、風景とのめぐり会いや出会いも私たちにとって大切ではないかと思う。柳田国男や永井荷風は風景を深く体験している。和辻哲郎もそうだ。モネやセザンヌやゴッホも風景的世界の深いところで生きている。

キャンパスは希望と夢に満ちあふれた空間だ。人生とは何か、この私は誰なのか、ということを真剣に問うことができる場所だ。友情が体験できるところだ。私のゼミナー

ルではマックス・ウェーバーやデュルケムやジンメル、あるいはテンニエス……、また、現象学的社会学や日常生活の社会学などにかかわる文献、現代社会についてのさまざまなテキストなどを幅広く読んでいるが、これまでカフカ



白馬三山のうち鑓岳と杓子岳　白馬山麓・栂池にて

やサルトルやカミュなど数多くの作家の小説もテキストとして用いてきた。柳田国男や柳宗悦や今和次郎などの著作もつぎつぎにテキストとなってきている。柳田も柳も今もすばらしい。彼らのまなざしは庶民の日常生活、人びとの生活空間、さまざまな場所、手元、身辺、道具、風景などに向けられている。社会の理解、人間の理解、時代の理解を目的としてテキストを用いての人と人との交わりのなかで私のゼミナール活動がおこなわれてきた。こうした活動の一環として春合宿、夏合宿がおこなわれてきたが、合宿先での日々がつぎつぎにクローズ・アップされてくる。

一九八九年の夏合宿は白馬山麓の栂池（つがいけ）でおこなわれた。長野県北安曇郡小谷村（おたりむら）での三泊四日だった。柳宗悦の『民芸四十年』、フランクリンの『自伝』（いずれも岩波文庫）その他の本を用いての合宿だった。自由時間に学生と一緒に塩の道（千国街道）を歩いた。石仏である百体観音などを眺めながらの短時間の散策だったが、古道の味わいと風情はまことに深かった。日本海に臨む糸魚川（いといがわ）から松本にいたる生活の道だったのだ。小谷村の沓掛には牛方宿が残っている。塩の道を旅した人や塩俵を運んだ牛と牛方が宿をとったところだ。往時のおもかげがよく残っている。茅葺き（かやぶき）屋根の家であり、〈いろり〉も残っている。小谷村のそこここでまだこうした茅葺きの草屋根をいくつも見ることができたが、こうした屋根をトタンでおおった屋根も私た

ちの目に入ってきた。この牛方宿の上座敷の床の間に「千国又兵衛家家相図」が飾られていた。かなり大きなものだったが、これは屋敷図と家の間取り図がひとつになったものだった。家の近くの立木が描かれているから、風景が見られる図ということもできる。家のなかの特定の場所を中心として東西南北の方位がはっきりと放射状にこまかく描かれている図だった。驚くべきことはこの図には星座が方位に応じて描き込まれていることだ。居住空間と場所がコスモスとひとつになっているような図なのである。方向と方位と方角がこれほど明瞭に表示されている図は珍しい。塩の道はまことに人間的な道だった。小谷村の小谷郷土館で民俗資料やさまざまな民具などを見ることができた。そこで屋根板をつくる道具である〈こばわりなた〉と〈なたの背をたたくつち〉などをスケッチした。さまざまな民具や民家に人びとの暮らしの歴史が生きているのである。

九月二十一日、合宿の最終日だったが、ようやく白馬連峰を栂池の野に咲く色とりどりのコスモスとともに眺めることができた。光のなかで山容が刻々と変わっていった。

モネはルーアン大聖堂の連作において時の移ろいと光と色彩の変化をみごとに描いている。モネの睡蓮の連作に見られる場所と風景がある。睡蓮は〈時間〉の花なのである。

※　本文中のスケッチ二点は筆者が描いたものである。

〈文　献〉

○柳宗悦『民芸四十年』岩波文庫、一九八四年。
○今和次郎『日本の民家』岩波文庫、一九八九年。
○ボルノウ／大塚恵一ほか訳『人間と空間』せりか書房、一九七八年。
○レペニース／岩田行一ほか訳『メランコリーと社会』法政大学出版局、一九八七年。
○トゥアン／山本浩訳『空間の経験　身体から都市へ』筑摩書房、一九八八年。
○ギデンズ／友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳『社会理論の最前線』ハーベスト社、一九八九年。
○J. D. Douglas, Introduction to The Sociologies of Everyday Life, Boston : Allyn and Bacon, Inc., 1980.
○A. J. Weigert, Sociology of Everyday Life, New York & London : Longman, 1981.
○山岸健『社会的世界の探究　社会学の視野』慶應通信、昭和五二年。
○山岸健『日常生活の社会学』NHKブックス三〇九、日本放送出版協会、昭和五三年。
○山岸健編著『日常生活と社会理論』慶應通信、昭和六二年。

北海道大学図書刊行会

■北海道大学情報ネットワークシステム（HINES）が三年計画で設置されることになり、小会も利用を申し入れた。HINESはキャパシティ四〇〇Mbps。学内に二、三千台ともいわれるすべてのコンピュータを高速の通信路（主幹線は光ファイバ）で結ぶインテリジェントキャンパスLANである。

■いまのところ、小会の電子編集・出版システムへの係わり方は、ワープロ・パソコンを使い、一部原稿の電子化とその処理（校正と部分的編集）をおこなうというごく初歩的段階にすぎない。電植化いちじるしい札幌市内の印刷所だが、電子化の大きなメリットの一つオンラインデータ伝送などは、ごく限られた範囲でしか採用されていない。盲蛇に怖じず妖怪に手を出そうとしているところかもしれない。

慶應通信

◆『地中海世界と宗教』（坂口昂吉編著・定価四四二九円）／南欧とイスラム圏における諸宗教の併存ないし重層関係を独自の世界として把えた比較研究書。

◆『生命と倫理』（日本倫理学会論集24・定価三五〇二円）／東西の伝統的生命観の検討後、バイオエシックス等の新しい生命観から「悩死」「自殺」他を論究。

◆『現代の学校にもとめられるバリア・フリー環境』（野村みどり著・定価二六七八円）／障害者の適合できる建物や施設を多くの図版・写真により解説。

◆『臨床音声学の理論と実際―正しい構音と発音』（濱崎健治著・定価六一八〇円）／言語障害教育の詳細な基本的手引書。

◆『イギリスの児童福祉』（小松隆二著・定価二二六六円）／転換期に直面した児童福祉の全般的な分析と最新情報を紹介。

大学出版部ニュース

産能大学出版部

「違った職業の人と話していて思いがけない企画が浮かぶことがある。著者（青木匡光）は多彩な人脈を背景に、メディエーター（人材接着業）という知的サービス業を主宰している。本書（『企画を引き出す異業種交流術』）は異業種人から新企画の引き出し方を説く、プロが初めて体験的に明かす企画力断然アップの実践学だ。」（以上、毎日新聞七月十九日付書評）

『最新目標による管理』（幸田一男著）は、旧版『目標管理の進め方』が刊行されてから二十数年ぶりの全面改訂版だ。

「『目標による管理』という考え方が日本の各企業に導入されて久しい」が、「最新のデータや事例を紹介することで時代変化に対応」したテキストである。

（「　」内はベストマネジメント誌の書評より）

玉川大学出版部

「玉川学園教養シリーズ（各巻定価一五四五円）」として、五月に第一期として三点、九月に第二期として三点を刊行した。本シリーズは各界で活躍している著名人の、玉川学園での講演や機関誌「全人教育」に寄稿されたものの中から秀逸なものをテーマ別に編集したものである。骨子は教育論であるが理論で筋書き通り展開する教育学者の教育論と異なり、実体験に裏づけられた内容であるので、子どもをもつ親や共通の悩みを抱える教師たちからの反響も多い。既刊六点は『教育を考える』『子どもの教育』『未知への挑戦』『先生のこころ』『こころの教育』『国際化時代の教育』である。精確な理論で展開する専門書とは一味違った新鮮で軽妙な教育論であると自負している。続刊予定。

中央大学出版部

◆中島和子著『黒人の政治参加と第三世紀アメリカの出発』

一九六一年以降、たびたび南部黒人社会に住み込み、内部から黒人の政治運動を凝視してきた著者は彼らが既成の政治的桎梏に挑戦し、新しい政治システムを生み出す「草の根」運動の担い手として、差別撤廃、自由化、民主化闘争に取り組む姿を詳述する。

国際的連帯を伴ったこの黒人非暴力直接運動が、独立第三世紀を歩み出したアメリカの政治的動向に与える衝撃の大きさを示唆する本書を、現代を考え、世界の明日を思う人々に贈る。

定価三二〇〇円

◆今栄蔵著『貞門談林俳人大観』

大学出版7号出版部ニュースでお知らせした本書が、十月、芭蕉翁記念館で文部大臣賞を受賞した。　定価一五四五〇円

東海大学出版会

●この秋の新シリーズが2つ。1つは固体物理学の先鋒ジュラルド・バーンズによる「バーンズ固体物理学」(全5巻)。もう1つが確率論の第一人者アタナシアス・パポリスの「パポリス応用確率論」(全3巻)です。どちらも、大学生・院生のテキストとして、研究者・技術者の参考書として最適。(完結は'90年3月予定)●人生論として読める『セネカ道徳論集(全)』茂手木元蔵訳が11月に刊行。ローマ時代の政治家セネカは暴君ネロ皇帝の師であり波瀾万丈の生涯をおくった。「個人の自足」と「心の平静」を説いたその処世術は、ヨーロッパの近代やルネッサンスに影響を与え、今日にまで及んでいます。本書はセネカの代表的著作の本邦初完訳。定価二万円(税別)特価一万七千円('89年12月迄)

東京大学出版会

「21世紀へのグローバル・ポリティクス」をキャッチ・フレーズに、『講座国際政治』全五巻(有賀貞・宇野重昭・木戸蓊・山本吉宣・渡辺昭夫編、各二二六六円)が刊行を開始した。

現代世界においては、一方ではソ連のペレストロイカやそれに対応した米ソ(核)軍縮といった動きはみられるものの、他方で地域紛争や諸民族の分離・独立運動などは下火になる気配もなく、また「地球的問題群」といわれるようになった環境問題の行方が懸念されるなど、もうすぐそこまで迫ってきた21世紀への展望はまだまだ不透明であると言わざるを得ない。

本講座は、かかる事態に関心をもつ読者に対しグローバルな視点からの考え方を提供すべく、学界の中堅・若手を中心に執筆された意欲的企画である。

東京電機大学出版局

『日本的自然観の変化過程』斎藤正二著／定価一一三三〇円。本書は、戦争中のサクラ博士コト三好学博士の〈サクラの公理〉の第四命題を、戦後の中尾佐助の『栽培植物の世界』を媒介にして、次のように発展させている。―中華帝国から美学ごと輸入された平安朝貴族の好尚植物「桜」を、園芸植物の八重桜として大衆化させたのは中世関東の武士・農民であった。自家不和合性 self-incompatibility の生物学的特質をもつサクラが、多様・多彩な歴史的変化をとげてゆくなかで、中国伝来の〈象徴体系〉としてのサクラ美学だけが唯一不変なものとして骨化の極、天皇制国家の国粋美に昇華した。とある。「国際日本化」状況を解読するうえで、極めて有効である。(図書新聞・一九八九・八・二六付いいだ もも書評より抜粋)

東京農業大学出版会

『21世紀の農業展望』シンポジウム報告書シリーズ。本学の創立九十周年を記念に発足し、以来毎年、大学での開催と合せて地域農業が直面している諸問題を討議する地方での開催を続けている。平成三年に迎える百周年には、東京農大が日本農業に対しての提言としてまとめる予定のもの。

昨年は東北で大きな肉牛生産地域を形成している岩手県で、「東北における畜産の未来像」のシンポジウムを開催した。シンポでは、畜産物市場の開放とは何か、わが国の牛肉市場にどう影響するのか。又実践的体験の「山地放牧による低コスト一貫生産」、黒毛和種を用いての高級銘柄牛「前沢牛」生産が報告・討議され、多くの反響を呼んでいる。

（報告書は送料とも五百円）

東京理科大学出版会

月刊誌「SUT」は、東京理科大学の英文名の頭文字でB5判七五頁位のもので、簡単に科学知識が得られるよう毎号一定のトピックスの特集を組んでいる。

大学の総力を挙げていますので、話題に困ることはありません。巻末に物理・化学の実験及び数学・科学英語のセミナー欄を設けて勉強指導の便を図っています。

○最近の特集号

きのこ

高温超伝導体の応用と作り方

都市の地下にもぐる

プラズマの科学と先端材料

高温超伝導体

理科教育の今日

品質管理の現状と展望

くすりの副作用

定価四五〇円

年間購読会員五一五〇円

大学出版部ニュース

法政大学出版局

E・ホン／北井一・原後雄太訳

サラワクの先住民―消えゆく森に生きる―　二七八一円（税込）

▼木材の伐採活動と近代化とによって、世界有数の熱帯林が危機にひんしているマレーシアのサラワク州。その森に住み、森林との調和を保ちながら生きようとする先住民たちの、伝統的焼き畑農業と豊かな生活文化を人類学者の目で記録。**東京新聞**

▼…先住民たちは、環境を破壊することなく、いかに自然の生態系のなかで生きてきたか。そしてそうした生活が、開発の名の下に行われる森林伐採によってどのように破壊されてきたかが、具体的数字をもって示されている。**綾部恒雄氏・産経新聞**

▼本書は地球環境問題を考える上で、もう一つの視点があることを教えてくれる。

岸康彦氏・日本経済新聞

放送大学教育振興会

▼放送大学の印刷教材を刊行して五年、総発行数は四百点をこえた。いずれも権威ある先生方のご執筆になり、放送大学以外の国公私立大、短大、高専等でも、年をおって好評裡に多くの図書が教科書として使用されている。▼ことしも一九三校が、一五四点の図書を採用。「平均一八〇頁というコンパクトさが魅力。それでいて必要なことはすべてもりこまれ、使い易い」というのが学生たちに共通の認識。

▼司法試験をめざす学生に人気の『**憲法概論**』（樋口陽一著・一六五〇円）『**国家と法**Ⅰ――**憲法**』（芦部信喜著・一六五〇円）をはじめ、『**行政学**』（西尾勝著・一六五〇円）、『**社会学入門**』（井上俊・大村英昭編著・一三四〇円）、『**企業と会計**Ⅱ――**税務会計**』（富岡幸雄著・三七〇円）、『**計測と制御**』（森正弘・小川鑛一著・三五〇円）……が好評。

明星大学出版部

日本近代教育史料研究会編『資料文政審議会』全七冊A5判函入、六八〇〇円

文政審議会は、大正十三（一九二四）年から昭和十年（一九三五）年まで約一一年間にわたって内閣に設置された教育政策審議機関である。同審議会は二つの大戦の戦間期という国内外の変動と転換の時代における日本の重要な教育施策を立案・審議してきた。例えば、現役将校の学校配属、幼稚園令の制定、青年訓練所の設置、師範教育や中等教育の制度整備、青年学校令の制定などは、すべてこの審議会の議を経て実行されたものである。この『資料文政審議会』全七冊の刊行により、両大戦間期の国家教育政策の動向を把握するうえでの基礎的史料を供給しえたと考えている。

（刊行のことばより）

早稲田大学出版部

▼高野雅之『ロシア思想史―メシアニズムの系譜』（定価三〇〇〇円）約千年にわたる様々な文学者・思想家の足跡をたどり、体制やイデオロギーの違いを超えてロシア精神に一貫して流れるメシヤ意識を検証する。

▼O・バウアー、酒井晨史訳『オーストリア革命』（定価六二五〇円）ハプスブルク君主国を震撼させ、崩壊に導いた民族革命と一九一八年一一月革命およびその後のブルジョアジーの復活までを鮮やかに描く。オーストリア革命に関する貴重な文献。

▼林京平編『絵入狂言本集』（早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇全32巻／第23回配本／第25巻、定価一五四五〇円）「龍女三十二相」「三世道成寺」「けいせい仏の原」など、江戸・上方の狂言本計二四点を収める。本叢書は三か月ごとに一冊ずつ配本中。

名古屋大学出版会

◇新刊紹介◇

▼**川崎寿彦他編『生と死の文化史―危機の生・豊饒の生』**（定価一八五四円）全体像を失った生と死の問題に、英文学・神話学・考古学・日本文学・西洋哲学・歴史学の光をあて、ライフ・サイクルの豊かなイメージを回復する。

▼E・ベリー著／岩崎宗治他訳**『シェイクスピアの人類学―喜劇と通過儀礼』**（三九一四円）シェイクスピアのロマンティック・コメディーをエリザベス朝の社会慣習と未開社会の通過儀礼とを見渡す人類学的コンテクストから解読。

▼A・ヴィンクラー編／保住敏彦他訳**『組織された資本主義』**（二七八一円）現代資本主義を特徴づける、新パラダイムとして提起されたこの概念の有効性と問題点を包括的に究明する。

大阪経済法科大学出版部

本学出版部は一九八七年九月に設立され、今年四月、大学出版部協会に加入した。

本学は国際部、アジア研究所などを設置して国際交流に力を入れている。本学出版部も大学出版の基本的理念に依拠しながら、国際関係、特に、アジア関係の出版に力を入れる。

アジア叢書は、アジア各国の現在時点に於ける注目されるべき問題などを取上げていく。

■**アジア叢書1「中国農村改革の道―人民公社解体と請負制―」**

■（大阪経済法科大学）アジアフォーラム・1**「中国の当面する民族問題」**、アジアフォーラム・2**「朝鮮史研究の動向」**

■**「回船大法考」**（窪田　宏著）が第二一回住田海事奨励賞を受賞、海事関係学会、海事関係研究団体から高い評価を受けた。

関西大学出版部

◆書評抄録『表現と実在』竹尾治一郎著／定価五六六五円

とくに第Ⅰ部と第Ⅱ部は本書の核心をなすものであり、そこでは著者の基本的な立場である「科学的実在論」が説得的に論証されている。とはいうものの、とくに第Ⅱ部では、論証を間然するところ無からしめるためとはいえ、数学の方程式にも似た論理式が応接の遑なく陸続と登場して、（中略）記号化されないタームについても、著者はそれらに対する充分な理解を既に自明の前提として情容赦もなく難解な議論を畳みかけてゆく。その点で本書は高度にアカデミックな労作であり、充分な知的装備と執拗で忍耐強い思考力とを具えていなければ登攀を許されない急峻な絶壁の趣がある。

『文化会議』通巻第二四三号　中埜肇評

九州大学出版会

▼平嶋義宏『学名の話』A5・五三五六円。学名の「文法」を縦横に解説すると共に、動植物の学名を豊富に例示して、その語源と構成法を明らかにした力作。同『蝶の学名』好評第二版出来。『クモの学名』現在刊行準備中。▼坪郷實『新しい社会運動と緑の党―福祉国家のゆらぎの中で―』A5・三五〇二円。新しい社会運動の中から生まれた緑の党は、一九八三年に政党システムに定着し、西ドイツ政治過程に衝撃波を発している。本書は福祉国家の再構築の試みを、新しい社会運動・緑の党・労働組合運動三者の問題圏から分析したものである。▼経済工学シリーズの第五巻、駄田井正『経済学説史のモデル分析』新刊。A5・二五七五円。第六巻、時永祥三『経済情報管理の基礎』近刊。以下続刊。

日本生命財団 平成元年度 研究助成・出版助成贈呈式

平成元年十月六日(金)、午後三時より星和会館「国際ホール」(日本生命日比谷ビル7階)において、日本生命財団の「平成元年度研究助成・出版助成贈呈式」が開催された。

多数の出席者の中、会長向坊隆氏の挨拶につづいて、理事長高橋壽常氏より、研究および出版助成対象者への目録贈呈が行なわれた。来賓祝辞、助成代表の内容発表後、閉会。ひきつづき、別室で盛大に懇談会が開かれた。

会長 向坊　隆氏

目録贈呈

新刊案内 '89・4～9

（表示価格は税込価格です）

■北海道大学図書刊行会

新版 情報処理概論　田中 一・長田博泰　二五七五円
生体リズムの研究　本間研一・本間サト・広重 力　九〇六四円
地質あんない 道南の自然を歩く　地団研道南班編　一四四二円
朝鮮植民地統治法の研究―治安法下の皇民化教育―　鈴木 敬夫　四九四四円
低温の生物物理と生化学　F・フランクス／村勢・片桐訳　三九一四円
創造性―文化を築き科学を進める力―　北海道大学放送教育委員会編　一七五一円
ロ承文芸の世界―日本とヨーロッパの昔話を中心に―　一八五四円
北海道大学放送教育委員会編

■慶應通信

明治立憲制と司法官　楠 精一郎　三五〇二円
経済原論講義要覧　富田 重夫　六一八円
教育社会学　仲康／岩内亮一　一五四五円
日本中世政治史　利光三津夫　一八五四円
北里柴三郎とその一門　長木 大三　二九八七円
近代日本政治の諸相　中村勝範編著　七二〇〇円
福祉の経済学　カトラー他／下田直樹訳　三三九九円
貨幣金融史　E・ビクターモーン／小竹豊治監訳　三〇九〇円
日本民間経済外交―一九〇五～一九一一―　木村 昌人　二五〇〇円
非営利組織体会計の研究〈慶應義塾大学商学会商学研究叢書〉　守永 誠治　二五七五円

■産能大学出版部

リゾート新時代の投資戦略　鍋田 紘亮　一五〇〇円
「あなたも発想力豊かな人」になれる　保坂榮之介　一五〇〇円
建設業のトータル利益倍増戦略　中谷 義昭　一八〇〇円
企画を引き出す異業種交流術　青木 匡光　一三〇〇円
「でっかい仕事」をやってみないか　産能大人材研編　一三五〇円
経営管理者の課題解決　上原 橿夫　二一〇〇円
最新・目標による管理　幸田 一男　二二〇〇円
企業内教育の盲点39　小橋 邦彦　二三〇〇円
工場改善の定石　西塚 宏　四五〇〇円
こうなれば会社は儲かる　北川 武夫　一五〇〇円
ワンコール・ワンクローズへの挑戦　碓井 實　一三八〇円
営業幹部の売上アップ発想法　岩下 昭雄　一五〇〇円
「できる管理者」80の要点　ME研究所編　一五〇〇円
祖父が語る「頭のよい子への育て方」　中山 正和　一三八〇円
経営者と哲学　松谷 義範　一八〇〇円
「無在庫販売」は営業を革新する　中井 久史　一五〇〇円
マネジャーのための実践OJT　上田 利男　二〇〇〇円

■玉川大学出版部

大学の国際文化学　阿部 美哉　二五七五円

教育を考える〈玉川学園教養シリーズ(1)〉小原哲郎編　一五四五円
子どもの教育〈玉川学園教養シリーズ(2)〉小原哲郎編　一五四五円
未知への挑戦〈玉川学園教養シリーズ(3)〉小原哲郎編　一五四五円
混声合唱アルバム―中学生用―　玉川学園編　一二三六円
意味への教育―学的方法論と人間学的基礎―
M・ランゲフェルド&H・ダンナー編／山崎高哉監訳　三二九六円
先生のこころ〈玉川学園教養シリーズ(4)〉小原哲郎編　一五四五円
こころの教育〈玉川学園教養シリーズ(5)〉小原哲郎編　一五四五円
国際化時代の教育〈玉川学園教養シリーズ(6)〉小原哲郎編　一五四五円

■中央大学出版部

現代社会の社会学　前納弘武編　二四〇〇円
日常生活のマス・メディア　美ノ谷和成編　二四〇〇円
イギリス・ロマン主義と啓蒙思想　岡地　嶺　二八〇〇円
法律家を目指す諸君へ〔一九八九年度版〕　中央大学法職講座運営委員会編　一〇〇〇円
現代イギリス政治研究―福祉国家と新保守主義―　小林　丈児　三二〇〇円
ME技術革新と経営管理
―日・西独・英にみる工作機械企業の国際比較―　中央大学企業研究所編　二六〇〇円
価格の理論・景気循環論　白杉庄一郎著／一井昭編　二九〇〇円
ボリビアの「日本人村」―サンタクルス州
サンファン移住地の研究―　国本　伊代　三二〇〇円
国際企業法―多国籍企業組織法―
B・グロスフェルト／山内惟介訳　五六六五円

■東海大学出版会

文章構成法　森岡健二編　一〇三〇円
コンピュータ入門　三木　容彦　二七八一円
電気・電子計測技術入門　斎藤正男監修　二五七五円
生化学入門　村上　枝彦　一六四八円
機械工学実験実習　機械工学実験実習編集委員会編　二八八四円
植物写真マニュアル　木原　浩　一五四五円
昆虫写真マニュアル　海野　和男　一五四五円
野鳥写真マニュアル　叶内　拓哉　一五四五円
日本的成熟社会論　佐原　洋　二二六六円
松前重義―その政治活動Ⅱ―　編纂委員会編　三六〇五円
パソコンFORTRANプログラミング　穴吹・李・久保田　二五七五円
都市・建築・コスモロジー〈記号学研究9〉　日本記号学会編　二五七五円
FORTRAN 応用数値計算　町田東一・小島紀男　三〇九〇円
新改訂版　食べものと成人病　五島雄一郎　一二三六円
病気の生物地理学　上本騏一・和田義人　二八八四円
魚類の繁殖行動　後藤晃・前川光司編　二八八四円
生物の形とバイオメカニクス　ウェインライト　一八五四円
宮本武之輔と科学技術行政　大淀　昇一　一二三六〇円
ゴルバチョフの世界政策と日ソ関係　杉森　康二　二〇六〇円
留学生の物理学　中村誠太郎監修　三〇九〇円
ヘルシーディナー　東海大学校友会館編　一四四二円
漢三國兩晉南朝の田制　藤家礼之助　七二一〇円
限界状態土質力学パッケージ　五一五〇〇円
応用数値計算パッケージ　二〇六〇〇円

■東京大学出版会

ドイツ言語哲学の諸相　麻生　建　三五〇二円

旧石器時代の石槍〈UP考古学選書7〉　白石　浩之　一八五四円
天明三年浅間山噴火史料集　児玉幸多他編　二六七八〇円
中世の東国　峰岸純夫　四六三五円
中国革命の起源　1915〜1949　L・ビアンコ／坂野正高訳　三八一一円
アフリカ現代政治　小田　英郎　二〇六〇円
世界システム〈現代政治学叢書19〉　田中　明彦　一八五四円
中国の人口問題　若林　敬子　三七〇八円
日本占領と労資関係政策の成立　遠藤　公嗣　七六二二円
経営財務講義［第二版］　諸井勝之助　三一九三円
衆議院委員会議録　57　衆議院事務局編　九二七〇円
衆議院委員会議録　58　衆議院事務局編　九二七〇円
総長室の1500日　森　亘　二四七二円
有澤廣巳　戦後経済を語る　聞き手　大来佐武郎他　二九八七円
戦争と平和〈現代政治学叢書17〉　猪口　邦子　一九五七円
ヘーゲル社会思想と現代　城塚登・濱井修編　七〇〇四円
蘇るパレスチナ〈新しい世界史12〉　藤田　進　一八五四円
弥生の布を織る〈UP考古学選書9〉　竹内　晶子　一八五四円
近世日本の国家権力と宗教　高埜　利彦　四九四四円
西ドイツの社会保障　社会保障研究所編　五六六五円
認識と価値　杖下　隆英　五〇四七円
流体工学　田古里哲夫・荒川忠一　四八四一円
明治開化期の錦絵〈史料館叢書別巻1〉　国立史料館編　二八八四〇円
衆議院委員会議録　59　衆議院事務局編　九二七〇円
衆議院委員会議録　60　衆議院事務局編　九二七〇円
Nonradial Oscillations of Stars　Second Edition　海野和三郎他　八二四〇円
方法としての中国　溝口　雄三　二二六六円
積石塚と渡来人〈UP考古学選書10〉　桐原　健　一八五四円
ニューディールとアメリカ資本主義　秋元　英一　八〇三四円
ベイズ統計学とその応用　鈴木雪夫・国友直人編　三九一四円
近世後期における主要物価の動態［増補改訂］　三井文庫編　四九四四円
管理社会と世界社会　庄司　興吉　二八八四円
造岩鉱物学　森本　信男　四三二六円
ラン藻という生きもの〈UPバイオロジー75〉　藤田善彦・大城香　一四四二円
成層圏オゾン［第2版］〈UPアースサイエンス3〉　島崎　達夫　二四七二円
衆議院委員会議録　61　衆議院事務局編　九二七〇円
衆議院委員会議録　62　衆議院事務局編　九二七〇円
心のありか〈シリーズ人間と文化3〉　村上陽一郎編　二四四七二円
ゆとり〈東京大学公開講座49〉　森　亘編集代表　二二六六円
神経回路網モデルとコネクショニズム〈認知科学選書22〉　甘利　俊一　一八五四円
革命〈現代政治学叢書4〉　中野　実　一九五七円
天文資料集　大脇・磯部・斎藤・堀　三二九六円
衆議院委員会議録　63　衆議院事務局編　九二七〇円
衆議院委員会議録　64　衆議院事務局編　九二七〇円
縄文の生態史観〈UP考古学選書13〉　西田　正規　一八五四円
国際関係論［第2版］　衛藤瀋吉・渡辺昭夫他　二五七五円
細胞社会とその形成　江口吾郎・鈴木義昭・名取俊二編　三九一四円
光源氏論　阿部　秋生　四九四四円
データでみる大阪経済60年　大阪市立大学経済研究所編　六九〇一円
衆議院委員会議録　65　衆議院事務局編　九二七〇円
衆議院委員会議録　66　衆議院事務局編　九二七〇円

心のはたらき〈シリーズ人間と文化4〉養老　孟司編　二四七二円
宗教民俗学　宮家　準　四六三五円
現象学的心理学　E・キーン／吉田章宏・宮崎清孝訳　三〇九〇円
講座国際政治1　国際政治の理論　山本吉宣他編　二二六六円
講座国際政治2　外交政策　有賀貞他編　二二六六円
聞き書　南原繁回顧録　丸山真男・福田歓一編　四三二六円
日本における産地綿織物業の展開　阿部　武司　七〇〇四円
中国郷村祭祀研究　田仲一成　二五七五〇円
自由境界問題〈UP応用数学選書13〉　河原田秀夫　二八八四円
スペースプレーン―超高層飛行力学―　加藤寛一郎　三九一四円
九州の活構造　九州活構造研究会編　四九四四〇円
衆議院委員会議録　67　衆議院事務局編　九二七〇円
衆議院委員会議録　68　衆議院事務局編　九二七〇円
Japanese International Trade And Investment Law　松下満雄・T. J. Schoenbaum　六一八〇円
The Japanese Social Structure 2nd Edition　福武　直　三二九六円
大日本史料　第二編之二十三　東京大学史料編纂所編　五七六八円
大日本史料　第八編之二十四　東京大学史料編纂所編　八二四〇円
大日本維新史料　井伊家資料十六　東京大学史料編纂所編　七四一六円
大日本古文書　大徳寺文書別集一　東京大学史料編纂所編　四七三八円
大日本古文書　東大寺文書十四　東京大学史料編纂所編　四七三八円
大日本古文書　幕末外国関係文書四十二　東京大学史料編纂所編　五七六八円
大日本近世史料　近藤重蔵蝦夷地関係史料三　東京大学史料編纂所編　四三二六円
日本関係海外史料　オランダ商館長日記原文編七　東京大学史料編纂所編　七四一六円

■東京電機大学出版局

図解データ通信システム〈新情報テキスト〉　田中公治・里田康太　二〇六〇円
電気材料―新材料利用の方向づけ―［改訂新版］　田中　政直　三〇九〇円
フローチャートのかき方［改訂新版］　溝口　貞彦　一七〇〇円
超電導材料〈ハイテク選書〉　萩原　宏康　一三八〇円
図解Z80マシン語制御のすべて―ハードからソフトまで―　白土　義男　三〇九〇円
第二種情報処理試験全問題解答集［'89秋季版］　東電学園高等部編　二四七二円
第一種電気工事士受験必携　東電学園高等部編　二二六六円
やさしいLevel II COBOL ―データベースと経理システム―　黒田　康太　二〇六〇円
第一種情報処理試験全問題解答集［'90年版］　二二六六円

■東京農業大学出版会

■東京理科大学出版会

■法政大学出版局

経済のマネージャビリティ〈比較経済研究所研究シリーズ4〉　法政大学比較経済研究所／川上忠雄・杉浦克己編　三〇九〇円
ヤマト・琉球民俗の比較研究　下野　敏見　一〇〇九四円
エチュード　G・バシュラール／及川馥訳　一六四八円
松永貞徳―俳諧師への道―　島本　昌一　一三三九円
白い夜明け―エスキモー・サガ―

アランとルソー　J・ヒューストン／工藤政司訳　二三六九円
都市・階級・権力　A・カルネック／安斎・並木訳　二五七五円
芸術の手相　M・カステル／石川淳志監訳　二五七五円
邪な人々の昔の道　G・ピコン／末永照和訳　二八八四円
カント読本　R・ジラール／小池健男訳　二五七五円
日本中世商業史の研究　浜田義文編　二八八四円
〈誠実〉と〈ほんもの〉　小野　晃嗣　七〇〇四円
文の抗争　J＝F・リオタール／陸井四郎・他訳　二五七五円
フランス文学とスポーツ　トリリング／野島秀勝訳　三九一四円
鮑（あわび）　シャールトン／三好郁朗訳　二八八四円
野生人とコンピューター　ものと人間の文化史・64／矢野　憲一　二五七五円
人間と自然界　ドムナック／古田幸男訳　二二六六円
太平洋　キース・トマス／山内昶監訳　三九一四円
横笛と大首絵　P・ベルウッド／植木武・服部研二訳　九九九一円
サラワクの先住民　高尾　一彦　二八八四円
雑誌　同時代　53号―小特集〈かたち〉―黒の会編　二七八一円
象徴表現と解釈　E・ホン／北井一・原後雄太訳　一〇三〇円
フランス革命と芸術　T・トドロフ／及川馥・小林文生訳　二三六九円
中世の旅　スタロバンスキー／井上堯裕訳　二六七八円
変化の言語　N・オーラー／藤代幸一訳　三九一四円
死と病と看護の社会史　P・ワツラウィック／築島謙三訳　二〇六〇円
資本論をどう読むか　新村　拓　二八八四円
精神の売春としての政治　J・ビデ／今村仁司・他訳　四一二〇円
虚構の中のアイデンティティ　クンナス／木戸・佐々木訳　二五七五円
―日本プロレタリア文学研究序説―　前田　角蔵　二八八四円

■放送大学教育振興会（○印はビデオ・＊印は別売テキストあり）

近代の思想〔改訂版〕　中埜肇・湯川佳一郎　一三四〇円
存在と価値―現代哲学の課題―　今道友信編著　二二七〇円
心理学　大山正・詫摩武俊編著　一三四〇円
社会心理学　中川大倫・山口勧編著　一七五〇円
発達段階の心理学　宮川知彰・星薫編著　二一六〇円
心理・教育における測定法　肥田野直編著　一九六〇円
記号論　吉田　夏彦　一三四〇円
教育思想Ⅰ―発生と展開―　村井　実　一三四〇円
教育思想Ⅱ―近代からの歩み―　村井　実　一六五〇円
情操の教育〔改訂版〕―遊び、読み物、音楽を通して―　片岡徳雄・高萩保治編著　一六五〇円
家庭教育〔改訂版〕　山村　賢明　一六五〇円
学校教育〔改訂版〕　深谷昌志編著　一七五〇円
青少年文化〔改訂版〕　深谷昌志・門脇厚司　一九六〇円
障害児の心理と教育〔改訂版〕　寺田晃編著　一九六〇円
生涯教育論〔改訂版〕―生涯学習社会の発展をめざして―　麻生　誠　一九六〇円
世界歴史と国際交流―東アジアと日本―　田中健夫編著　二〇六〇円
〈アジア論Ⅲ〉中国・近代への歩み　浜口　允子　一六五〇円
西欧政治史　犬童　一男　一六五〇円
日本政治史―外交と権力―　北岡　伸一　一六五〇円
日本経済史〔改訂版〕　三和　良一　二二七〇円
憲法概論　樋口　陽一　一六五〇円
犯罪と刑法　内藤　謙　一六五〇円
西欧政治思想　田中　治男　一六五〇円
日本政治思想　松澤　弘陽　一九六〇円
現代の政治理論　曽根　泰教　二二七〇円
社会学研究法　甲田和衞・高坂健次　一九六〇円
近代日本の生活と社会　大濱徹也・熊倉功夫　一九六〇円

芸能と社会　小沢　昭一　一九六〇円
日本経済と産業と企業　小林靖雄・磯部浩一・宮沢健一　一八五〇円
数理計画法　加瀬滋男・横山雅夫編著　一三四〇円
現代の経済学　嘉治　元郎　一三四〇円
産業と企業〔改訂版〕―産業と企業の相互作用域の解明―　黒澤　一清　一六五〇円
企業と人材　石田　英夫　二四七〇円
マーケティング論　八巻　俊雄　一六五〇円
生産管理　秋庭雅夫・横山雅夫編著　一六五〇円
経営管理　森本三男編著　一七五〇円
財務会計　若杉　明　一九六〇円
産業および生業としての農業　渡部　忠世　一六五〇円
人間と社会環境　大橋力編著　一九六〇円
住生活史―日本人の住まいと生活―　平井　聖　二二七〇円
家庭の経営―多様化するライフスタイルの中で―　原ひろ子編著　一九六〇円
環境科学　山根靖弘編著　一六五〇円
余暇生活〔改訂版〕―その現状と課題―　一番ヶ瀬康子編著　一六五〇円
家庭の福祉　仲村　優一　一六五〇円
確率論　清水　良一　一七五〇円
統計学　長坂　健二　三五〇〇円
統計的データ解析とソフトウェア　大隅　昇　三五〇〇円
科学と実験―その考え方と進め方―　宮代彰一編著　二五八〇円
物理科学史　坂本　賢三　一六五〇円
量子論　野田春彦・阿部龍蔵編著　一六五〇円
人間の生物学〔改訂版〕　太田　次郎　一六五〇円
〈生命科学史Ⅰ〉生物研究の文化史　筑波　常治　一三四〇円
〈生命科学史Ⅱ〉生物研究を担った人びと　筑波　常治　一六五〇円
生命のしくみⅠ〔改訂版〕―生化学の基礎―　木原弘二編著　一六五〇円
集団遺伝学―遺伝子はどのように進化するか―　石和貞男・五條堀孝　一九六〇円
恒星天文学　吉岡　一男　二〇六〇円
英語Ⅱ―Creative Communication in Social Situation―　比嘉正範・平賀正子編著　一六五〇円
英語Ⅲ―Living English Through Film―　鈴木博・高山一郎編著　二五八〇円
英語Ⅳ・TVドラマの英語―An Introduction to Living English―　國吉丈夫編著　三一九〇円
英語Ⅵ―Advanced Reading Skills―　山内久明・グレアム＝ロー編著　二二七〇円
ドイツ語Ⅰ〔改訂版〕　辻珂・中山純　二〇六〇円
ドイツ語Ⅱ　辻珂・中山純　一六五〇円
ドイツ語Ⅲ―異文化の波紋―　辻　珂　一九六〇円
フランス語Ⅰ〔改訂版〕―フランス語の基礎表現―　福井芳男編著　二二七〇円
フランス語Ⅱ―フランス語の理解―　福井芳男編著　二二七〇円
フランス語Ⅲ―文法の基礎―　福井芳男編著　一七五〇円
ロシア語Ⅰ―文法・表現の基礎―　川端香男里・安岡治子　一九六〇円
ロシア語Ⅱ―生きた文章を味わう―　川端香男里　一九六〇円
中国語Ⅰ　傅田　章　一六五〇円
中国語Ⅱ　傅田　章　一五五〇円
Japanese Ⅰ　A＝アルフォンソ・西原鈴子・新美和昭　三五〇〇円

Japanese Ⅱ
A＝アルフォンソ・西原鈴子・新美和昭　三五〇〇円
日本の言語文化　古田東朔編著　一九六〇円
フランスの言語文化Ⅰ　福井芳男・西澤文昭編著　一九六〇円
ロシアの言語文化Ⅰ　川端香男里編著　一七五〇円
アメリカの言語文化Ⅰ―An Introduction to American Culture―　比嘉正範編著　二八八〇円
○＊衣生活の科学（ＶＨＳ15巻セット・1巻45分）　矢部　章彦　三〇〇〇〇円
○＊太陽系の科学（ＶＨＳ15巻セット・1巻45分）　小尾　信彌　三〇〇〇〇円
○＊社会生活と法（ＶＨＳ15巻セット・1巻45分）　山田　卓生　三〇〇〇〇円
○＊母子保健（ＶＨＳ30巻セット・1巻45分）　古谷　博　六〇〇〇〇円
○＊地域社会学（ＶＨＳ15巻セット・1巻45分）　加藤　秀俊　三〇〇〇〇円
○＊情報工学（ＶＨＳ15巻セット・1巻45分）　都倉　信樹　三〇〇〇〇円
○＊物質工学（ＶＨＳ15巻セット・1巻45分）　町田周郎ほか　三〇〇〇〇円
○＊ことばとコミュニケイション（ＶＨＳ15巻セット・1巻45分）　吉田　夏彦　三〇〇〇〇円
○＊日本語教授法（ＶＨＳ15巻セット・1巻45分）　官地裕・田中望　三〇〇〇〇円
○生物学のなぞ（ＶＨＳ1巻45分）　野田　春彦　二〇〇〇〇円
○古代史を掘る―史跡と保存―（ＶＨＳ1巻45分）　坪井　清足　二〇〇〇〇円
○科学がわれわれに与えるもの（ＶＨＳ1巻45分）　江崎玲於奈　二〇〇〇〇円
○マイロボットへの展開（ＶＨＳ1巻45分）　加藤　一郎　二〇〇〇〇円
○生きている化石に学ぶ（ＶＨＳ1巻45分）　浜田　隆士　二〇〇〇〇円
○21世紀への画像工学（ＶＨＳ1巻45分）　坂田　俊文　二〇〇〇〇円
○資源としての氷河（ＶＨＳ1巻45分）　樋口　敬二　二〇〇〇〇円
○あなたはあなたを知っているか（ＶＨＳ1巻45分）　遠藤　周作　二〇〇〇〇円
○家族の中の男と女（ＶＨＳ1巻45分）　下村　満子　二〇〇〇〇円
○生きている鏡像（ＶＨＳ1巻45分）　大森　荘蔵　二〇〇〇〇円
○美術の起源（ＶＨＳ1巻45分）　木村　重信　二〇〇〇〇円
○江戸文化の現代性（ＶＨＳ1巻45分）　西山松之助　二〇〇〇〇円
○日本海域の古代史像（ＶＨＳ1巻45分）　門脇　禎二　二〇〇〇〇円
○わび茶への道（ＶＨＳ1巻45分）　千　宗室　二〇〇〇〇円
○海の道・東西交易史（ＶＨＳ1巻45分）　和田　久徳　二〇〇〇〇円
○超伝導とは何か（ＶＨＳ1巻45分）　田中　昭二　二〇〇〇〇円

■明星大学出版部
相対論・量子論　鈴木辰三郎・合田一夫　三六〇五円
図書館と漢籍　松見　弘道　三〇九〇円
資料文政審議会　全七冊　日本近代教育史料研究会　六八〇〇〇円

■早稲田大学出版部
ロシア思想史―メシアニズムの系譜―　高野　雅之　三〇〇〇円
早稲田文学　4月号　早稲田文学会　五三〇円

お伊勢山遺跡の調査　第3部　縄文時代
早稲田大学所沢校地文化財調査室編　一三四〇〇円
自註　万葉小曲　四方寿　水野　祐　六五〇〇円
早稲田文学　5月号　早稲田文学会　五三〇円
野鴨追い　エリザベス朝喜劇10選第9巻
J・フレッチャー／岡崎涼子訳　一四四二円
現代国際政治のダイナミクス　大畠英樹・原彬久編　二九〇〇円
改訂　現代テレビ放送学―現場からのメッセージ―
渡辺みどり　一八〇〇円
蛇谷遺跡　上総国分寺台遺跡調査報告Ⅳ
上総国分寺台遺跡調査団編　九八〇〇円
早稲田文学　6月号　早稲田文学会　五三〇円
政治学講義　佐藤・中原・三浦編　三二〇〇円
オーストリア革命　O・バウアー／酒井晨史訳　六二五〇円
小野　梓〈早稲田人物叢書2〉　中村　尚美　二三五七〇円
演劇年報　一九八九年版　早稲田大学演劇博物館編　三〇〇〇円
馬琴評答集二　早稲田大学蔵資料影印叢書第28巻
柴田光彦編　一五四五〇円
早稲田文学　7月号　早稲田文学会　五三〇円
日本建築画像大系（ビデオ）　第3回製作作品18～25巻
尾島俊雄企画・監修　各巻三〇九〇〇円
21世紀住宅のシナリオ　尾島俊雄編著　三九〇〇円
エピソード　大隈重信　125話　奥島・中村監修　一五〇〇円
早稲田文学　8月号　早稲田文学会　五三〇円
チープサイドの貞淑な乙女　エリザベス朝喜劇10選第8巻
T・ミドルトン／小野正和訳　一四四二円
早稲田文学　9月号　早稲田文学会　五三〇円
絵入狂言本集　早稲田大学蔵資料影印叢書第25巻
林　京平編　一五四五〇円
早稲田文学　10月号　早稲田文学会　五三〇円

■名古屋大学出版
あなたが歴史と出会うとき―経済の視点から―
堺　憲一　二〇六〇円
ロシア語読本―現代を読む―　丹辺文彦他訳　一八五四円
全身振動の生体反応
H・デュピィ他著／松本忠雄他訳　四六三五円
保護主義か自由貿易か―日本と西ドイツの比較研究―
真継　隆他編　三二九六円
変動為替相場制の理論　改訂版　奥村　隆平　二八八四円
イングランド銀行金融政策の形成　金井　雄一　三六〇五円
マーシャルからケインズへ―経済学における権威と反逆―
根井　雅弘　二五七五円
ラテン文學史〔覆刻〕　田中　秀央　五一五〇円
ブレイク全著作　W・ブレイク著／梅津濟美訳　二〇六〇〇円
学窓雑記Ⅱ　飯島　宗一　二〇六〇円
尾張藩漫筆　林　董一　二五七五円
生と死の文化史―危機の生・豊饒の生―
川崎寿彦他編　一八五四円

■大阪経済法科大学出版部
ドイツ反ファシズム抵抗運動史―第1次大戦～第2次大戦のドイツ―
上林貞治郎　二八八四円
明治新聞ものがたり　片山　康隆　一五四五円
優越感の体質―近隣国を見る日本人の目―
葛本　一雄　九二七円
ジャーナリズムを叱る「増補・改訂版」　岡本　愛彦　六一八円
回船大法考―住田正一博士・（廻船式目の研究）拾遺―

窪田　宏　一二三六〇円
中国農村改革の道［アジア叢書1］―人民公社解体と請負制―
杉野明夫監修　二三六九円
アジアフォーラム・2（大阪経済法科大学）―シンポジウム・朝鮮史の動向―　大阪経済法科大学アジア研究所編　六一八円
現代に於ける唯物弁証法―日中唯物弁証法シンポジウム論文集―
大阪経済法科大学哲学研究室・北京大学哲学系共編　四九四四円

■関西大学出版部
大学体育の改造　伴　義孝　五六六五円

■九州大学出版会
文化と人間〈九州大学公開講座21〉　九州大学公開講座委員会編　一八五四円
現代西ドイツの企業経営と公共政策　原田溥・津守常弘編　三三九九円
新しい社会運動と緑の党―福祉国家のゆらぎの中で―〈北九州大学法政叢書8〉　坪郷　實　三五〇二円
九州のスギとヒノキ　宮島　寛　三六〇五円
基礎の限界状態設計法入門―外国規準の紹介と比較設計―　大塚久哲監修　三〇九〇円
九州大学七十五年史　史料編　上巻　九州大学七十五年史編集委員会編　六六九五円
九州大学七十五年史　史料編　下巻　九州大学七十五年史編集委員会編　六六九五円
英語学の視点　大江三郎先生追悼論文集編集委員会編　三六〇五円
経済学説史のモデル分析〈経済工学シリーズ〉　駄田井　正　二五七五円
学名の話　平嶋　義宏　五三五六円

生活と科学Ⅱ〈九州大学公開講座22〉　九州大学公開講座委員会編　二二六六円

●あとがき――

私ども大学出版部協会は、一九六三年六月、参加一〇大学の代表者によって設立されました。昨年から今年にかけて、創立二五周年ということでさまざまな催しももたれました。

大学出版部協会創立二五周年記念感謝の会が、東京のアルカディア市ヶ谷で開かれました。官界・学界・業界から約二八〇名の参加が得られました。中国大学出版社協会常務理事麻子英先生以下のご出席をいただきました。また今日の研修会には、韓国大学出版部協会会長琴東信先生をはじめ一五名の代表団をお迎えすることができました。

記念講演会もおこなわれました。札幌、東京、名古屋、京都、福岡、ほぼ日本全国を縦断する形となりました。もちろん大学人のみでなく広く一般知識人を対象としたもので、大学出版部協会の存在をよりアピールするためのよい機会でありました。

ブックフェアも行なわれました。協会加盟の大学出版部の母体のキャンパスを中心に、全国で六四個所、生協書籍部等の施設を利用したものでした。加盟大学の既刊全点を展示即売しました。六、三二八点の書目を収録した「二五周年記念総合図書目録」も二万部作成しました。

「大学出版部協会二五年の歩み　一九八八」と題した、A5判、一二四頁の小冊子も一万部作成しました。この小冊子には日本の大学出版部協会の二五年が要約されています。加盟大学出版部の歴史と現在、協会二五年の歩み年表、マスコミの見た大学出版部活動、会員出版部分野別刊行実績まで含めております。巻頭のメッセージには韓国大学出版部協会会長のキム・ウチャン（金禹昌）先生、中国大学出版社協会会長のルオ・グォジー（罗国杰）先生、アメリカ大学出版部協会会長のキャロル・ウォレス・オア先生、国際学術出版連合（IASP）のエドワルド・アスラクセン先生から寄せていただきました。儀礼的であり事務的な文章からはおよそ縁遠い真摯な語りかけが寄せられております。まさに大学出版部運動のグローバルな展開を象徴しております。

また今年一一月には、出版文化国際交流会と共催で東京・池袋のサンシャイン・ミプロ国際展示場で「世界の大学図書展」が実施され好評を得ました。

現在、協会加盟の大学出版部は一八校であります。そして、ご の事業に従事する専任職員は二〇五名（学校側の理事・評議員の数は除いております）、新刊書籍の点数は一九八八年度で五二〇点。これも雑誌、大学紀要等の数は除いております。しかしいずれの場合も母体は大学であり、大学の機能と知的人材スタッフの背景なしには、大学出版部の存在はあり得ません。

通常の協会活動は、全大学のメンバーが参加する年次総会（四月）と研修会（八月）、年末研修会（一二月）、出版五団体合同新年会（一月）がまずあげられます。

協会活動のなかで、もっとも重要なものは日常の部会活動であります。地道ではありますが、この活動が協会設立趣旨の使命を支えているといっても過言ではありません。協会運営のための山田幹事長、山下副幹事長を中心とする幹事会（別名、経営部会とも呼ばれております）、そして編集部会と営業部会であります。この三つの会は、いずれも月例会であります。編集・営業とも年度当初の総会決議事項である年間行事計画に沿って、大学出版部運動の実践を試みる行動部隊となるわけであります。先に申し述べました二五周年記念事業は、すべてこれらの幹事長、編集部会、営業部会の協力体制のもとに実現したものであります。また刊行助成部会、国際担当会も適宜おこなわれております。

一九八六年からは、広報誌「大学出版」が年二回定期的に発行されるようになり、大学出版運動のPRにつとめています。月刊の「新刊速報」も正確な記事内容として、内外の大学図書館、公共図書館に喜ばれております。今後、協会活動の指針としての役割を果してゆくことを自負しております。

（編集部会幹事　関野利之）

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北８条西８丁目 クラーク会館 TEL. 011-747-2308 FAX. 011-758-4071
慶應通信	〒108 東京都港区三田２－19－30 TEL. 03-451-3584 FAX. 03-451-3122
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘２－16－５ 自由が丘サンビル TEL. 03-724-9101 FAX. 03-717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園６－１－１ TEL. 0427-28-3213 FAX. 0427-28-3218
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742－１ TEL. 0426-74-2351 FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒160 東京都新宿区新宿３－27－４ 新宿東海ビル TEL. 03-356-1541 FAX. 03-341-1833
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷７－３－１ 東京大学構内 TEL. 03-811-8814 FAX. 03-812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町２－２ TEL. 03-294-1551 FAX. 03-294-2807
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘１－１－１ TEL. 03-420-2131 FAX. 03-706-8851(総務課)
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-260-4271 FAX. 03-260-4294
法政大学出版局	〒102 東京都千代田区富士見２－17－１ TEL. 03-237-1731 FAX. 03-237-8899
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門１－14－１ 郵政互助会琴平ビル４F TEL. 03-502-2750 FAX. 03-580-2876
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保２－１－１ TEL. 0425-91-5115 FAX. 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町１－103 TEL. 03-203-1551 FAX. 03-207-0406
名古屋大学出版会	〒464 名古屋市千種区不老町１ 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX. 052-781-0697
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺６－10 TEL. 0729-41-8211 FAX. 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 吹田市山手町３－３－35 関西大学会館 TEL. 06-388-1121 FAX. 06-330-3718
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎７－１－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX. 092-641-0172

大学出版(第８号)'89秋 平成元年12月10日発行 発行者 大学出版部協会幹事長 山田 渉
〒113 東京都文京区本郷７丁目３番１号東大構内 東京大学出版会内 電話 03-812-2111 (内)7954
頒布価格100円(本体97円)〒共